

STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-

[Novel] 和ヶ原聡司 [Illust] 大熊まい



© 2016-2018 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved. Developed by tri-Ace, Inc.

第五章・灼熱の記憶

惑星ヴィレの文明レベルは、決して高いものではなかった、

最頂目に見ても、地球の18世紀レベル。惑星規模の問題か総人口も決して多くなく、現生人類が存在していること自体、奇跡のような星だった。

ファブリーク、パーチェ、暗礁地帯の廃船、そしてベーベンで蓄積した私達のランビュランスに関する様々なデータは、ワープアウト直後にこのヴィレにパルスタワーが建設されていることを察知していた。

「ふふふふふふふふふ！ 賢者は歴史に学び愚者は経験に学びますが、僕はすべてに学ぶ連邦最高峰AI！ 最早生半可な妨害波では僕と艦長達を結ぶ熱いパッションを妨害することなどできません！ むしろこちらから妨害波に割り込んでよりクリアな通信を可能にしてやりますよひゃっほー！！」

ヴィレに乗り込むに当たり、最も気合いが入っているのはコロだった。

「艦長！ 惑星ヴィレに建設されているパルスタワーは、いずれも固い地表岩盤の下側にあるようなのです！ 僕らの通信波は固い岩盤なんか苦も無く通過します！ 安心して探索に降りてくださいね！」

いや、気合いは買うが、ここからはより慎重な行動が求められる。

ランビュランス本星に近い上に現在開発計画が進行中のこの星では、ファブリークよりも厳重な警備が敷かれていると見るべきだ。

ファブリークで出会った眼帯の男がランビュランスの中でどの程度の地位にある人物かは分からないが、いい加減向こうも、宙域を徘徊する所属不明戦闘艦の存在を警戒しているだろう。

「そうでしょうか。少なくともヴィレ近縁では、航宙艦や宇宙基地、人工衛星による警戒網は観測されません。どう考えてもザルですよ、警備」

「そんなことあり得るの？」

リーシュが全員の疑念を代弁するが、ミュリアがコロの説を補強する。

「思えばこれまでのランビュランス関連の施設は、もの凄く管理が雑よ。この前の廃棄船だって、普通の組織の船なら自沈を決定した時点で内部データなんて全部吹き飛ばはずだもの。これは予想んだけど、ランビュランス人……っていうのがあるとして……彼らは、人口が少ないんじゃないかしら」

「そうですね。コロくんにもとめてもらったバーベッド関連の書類を見ても、対処するため

の兵員をどう都合するかで、あちこちの部署が喧嘩してたみたいですし」

「だからこそ、ファブリークではゲリラなんてのがいたわけですしね！」

ウィニーとタイネーブも首肯する。

「でも、だからこそ正規兵で足りない分を傭兵なんかで補うことはありませんか？」
そう言ったのはレナだった。

「どうということなのですか、と尋ねると、レナはおずおずと言う。」

「いえ、単純に経験則からなんですけど、本当に兵士の数が足りないのと、重要なことでもとりあえず計画が運用できればいいやっという感じで、仕事を頼まれることが多かったので」

それは、もしかしてラクールホープを完成させるための素材を、レオン・D・S・ゲース博士とともにホフマン遺跡に採取しにいったことではないのでしょうか、と尋ねると、レナは肯定しつつも驚いたようだった。

「そ、そうです。そうなんですけど……艦長、本当に私達のこと、よく御存知なんですね。あと、どうして敬語なんですか？」

レナの表情が若干引き攣っているのを見て、リーシュとタイネーブとミュリアがそれぞれ、艦長、プラス2点、と言ったのを私の耳はしっかり聞いていた。

「仕方ありません。現代に生きる連邦軍人にとって、レナさんは伝説の存在！ GF隊で燻つてた艦長にとっては雲の上、星の彼方の人なのです！」

「私そこまで大層な人間じゃありません。ただの田舎娘です。あの冒険はたまたま色々なことが重なった末のこと……」

きつと偉人とは、偉業を為した人物というのは、こういうものなのだろうと思う。

「一応聞いておくけど、レナにそういう話をしてしまうことは、問題にはならないのかしら。タイムパラドックスが起こったりしない？」

ミュリアの問いは、さほど真剣みを帯びたものではなかった。

仕組みはどうあれ、私とレナ、そしてウイニーは、同時代に生きる人間ではないというところがはっきりしている。

そして過去の人間が未来を知ることによって、因果律が歪むことはあり得ない、というのが現代の連邦科学界が出した結論であった。

この宇宙には、あらゆる物質を過去、或いは未来へと移動させるタイムスリップを可能にする機能が存在することが確認されている。

連邦の公式記録にも、タイムスリップの記録が歴史の折々で確認されているし、『時』という現象に対して近年最も膨大なデータが蓄積されたのは、他ならぬフィデルが大きく関わったクロノス事変の最中だ。

『因果律』とか『運命』などと呼ばれる概念がある。

この世の全ては、予め定められた『何か』に沿って動いており、如何なる手段をもってしてもその定められた何かを変えることはできない、という趣旨でそれは解釈されてきた。

人類の歴史上、預言者、と呼ばれた人種は、その『何か』を見たり感じたり聞いたり書き写したりすることで『神』と接触する者とされたこともあった。

その因果律の理屈で言えば、過去から現在に繋がる時の流れの中で、未来と過去の接触は既に想定されていることと言える。

今、私とコロは、現代に伝わるレナ・ランフォードの偉業を、それを為す前のレナ本人に伝えてしまっている。

だがそのことによって私達の記憶は改変されないし、コロの内部データも変わっていない。それは、レナが未来を知ることと、レナが偉業を為すことに相関関係が無いことを意味している。

もちろん、大スターに出会った少年のような気持ちであれこれ喋り倒して17歳の少女にプレッシャーをかけている私の態度は、経歴を重ねた連邦軍人としてあるまじきものだった。大いに責められるべきであり、2点の加點もやむを得ない。

だが、連邦は経験によって、未来と過去の接触が『現在の進行』に影響を及ぼさないことを知っている。

このことが、逆に人の力ではどうしようもない『定められた運命』の存在を肯定してしまっているとする意見はあり、私はそれに反証できない。

連邦がまだ地球連邦と名乗っていた頃、当時未開惑星だったロークを襲う石化病の災禍を取り除くため、連邦史で最も有名な人物が時を遡った事件があった。

結果的に、彼が過去の時空で出会った者達こそが、彼らにとつての未来へと渡ったことで地球連邦とロークの危機は去り、連邦版図の拡大に貢献した。

そして、人が過去に渡っても、過去にとつての未来たる現在に人が渡っても、世界は、宇宙は、何も変わらず時を紡いだ。

だが一方で、当時の連邦にはロークを見捨てる、という選択肢も存在したのだ。むしろ常識的には、その判断は支持されるべきものだった。

だが、たった一人諦めなかった男がいたから、惑星ロークの運命は変わった。現在ロークは先進惑星の仲間入りをしており、遠からず連邦評議会の常任理事国へと推薦されるが、一歩間違えば星そのものが滅んでいたのである。

諦めなかった男の存在も、今の惑星ロークの状況も、結局は定められた運命だったのだ、と言う向きも、当然あるだろうし、その考えを私は否定しない。

だがそれを言っ、じゃあ何だという話なのだ、実際。決して変えられない運命とやらがもし仮に存在するとしても、それを観測できるのは過去と未来を同時に見据えられる『神』以外に有り得ない。

そして人が神の視点を持つことは決してなく、銀河を遍く見渡せば、歴史上その『神』ですら、神の視点を持ちえないことを、人は知っているはずなのだ。つまり、ある一点においてはゆるぎなく決まっていることがあるのは否定できない。

だが、その結節点以外における『運命』とやらは極めて流動的であり、定められた運命の

存在を肯定する者も否定する者も、その流れに責任を取る力など等しく持ち合わせていないのだ。

運命はあるんだ、変えられないんだ、と言ったって、何もしなければ死ぬだけだ。

運命は変えられるんだ、決まっていらないんだ、と言ったって、絶対にどうにもならないことというのが人生の中では頻繁に起こる。

それら全てを併せ呑んで、人として生きる、ということが時を紡ぐということなのではないからうか。

そして私も、レナも、そしてリーシュも、疑いようもなく人である。

ならば、時の流れの中で生きる生命として、いつ、何を知ったとしても、為すべきを為すには結局現在のただ一点に於いて一所懸命に生きる以外できることはないのだ。

つまり、何が言いたいかと言えば、

「これだから責任者ってのは話が長くて嫌になりますねー本当。つまりはレナさん個人の気持ち以外の部分では、特にタイムパラドックスは起こらないって言いたいわけでしょう？これはパワハラポイントシステムも設立した方がいいんじゃないですかー？ ああんっ！」

私はコロを蹴った。

「ヒドいですう……パワハラですよ」

「あつはつはつは！ 我らが艦長はとにかく生真面目だってことだね、私はそういうのは嫌いじゃないよ」

コロに言われると腹立たしいが、ネルに大笑されてしまうと今度は少し据わりが悪い。

何か、もの凄く大それたことを言ってしまったような気がするのだ。

「でも、僕は艦長の言うこと、よく分かります。運命に抗うなんて大層なこと言うつもりはありませんけど、それでも諦めなかったから、為せたことは確かにあります。助けられた人も、助けられなかった人も……いました。でも、僕は最終的には、自分が為そうとした瞬間には、その瞬間の全力を出していたと、思います」

「……そうね、そうかもれないわね」

フィデルがしみじみと言うことに、リーシュが静かに同意する。

「……もし決まった運命というものがあるのだとしたら、それは宇宙に生きる全ての人達から、ほんのちよつとだけ離れた場所にあるものなんだと思うんです」

すると、件のレナ本人が、まるで己に言い聞かせるように言った。

「私は……旅に出る前の私は、自分の出自に疑問を持っていても、命を懸けてまでそれを解き明かす冒険に出ようなんて微塵も思いませんでした。でも、ほんのちよつとのきっかけで、それをしようと思ったとき……きっと私は、自分の命から少し離れた場所にあった運命を、私の方に手繰り寄せることができたんだと思います。だから、きっと運命も味方してくれた。運命が見せてくれた真実は、良いことばかりじゃありませんでしたけど、手繰り寄せた運命

に寄り添ってくれた仲間がいましたから」

彼女が手繰り寄せた運命の結末を、私とコロだけが知っている。

だからこそ私は、レナが未来の己の偉業を知ってもしり込みしないという確信があった。

いや、これも良くない考え方なのだろう。

私はレナに呼びかける。

「はい」

コロの言う通り、私にとってレナやレナの仲間達は、伝説上の存在にも等しい。

だがそれは今この瞬間までで、リーシュに呼ばれた仲間達と同じく、これからはこの艦のクルーとして、私の仲間として、その力を貸してほしい。

「……お任せ下さい。できる限りのことを、させていただきます。不思議ですね。艦長は、私の仲間にとってもよく似ています」

「ええ？ 艦長がですかああ？ 十二英雄とおお？ 似ても似つかないと思いますよおお？」

先ほどのキツクの仕返しだろうか、コロが厭味ったらしくそう言うのに、レナは笑って頷いた。

「ううん、顔とかそういうことじゃなくてね、艦長の武器が。それ、確かフェイズガンって言うんですよね」

最近ではもう腰に下げっぱなしになってしまった私のフェイズガンをレナは指差した。

「フェイズガンは、私が旅に出ることになった一番最初のきっかけなんです。エクスペルには、古くから『光の勇者』の伝説があつて」

この地エクスペル 脅威に襲われ民苦しむ時 異国の服まといし勇者現れん 彼の者光の剣を携え人々を救いたもう。

今では恐ろしく有名になったその一節は、レナと並ぶ十二英雄にして連邦一の名門一族に名を連ねるクロード・C・ケニーがエクスペルに降り立ったときの状況に、ぴったり当てはまったという。

「なんだか、宇宙の果てに呼ばれたときに出会った人が、同じようにフェイズガンを持ってるのが、とても不思議な感じがしたんです」

そう言つて微笑むレナは、英雄などという称号にはまるで似合わぬ年相応の少女であった。

「行きましょう、艦長。ヴィレで、きつとできることがあるはずですよ」

だが、一方で伝えられるレナ・ランフォードの人柄にたがわぬ意志の強さでもって、彼女は我々の背中を押した。

「ミュリアさん、着陸座標の選定を」

「任せて。良さそうなところがあるわ」

コロとミュリアのコンビネーションも、心なしか気合いが入っているように見えた。

伝説の英雄の一人に背中を押され、私達は新たな星、ヴィレへと降り立つ。

「ひええええ！ 堪忍してください！ 神様仏様タワー荒らし様！ ウチらただの現場労働者ですよ！ ムリヤリ連れて来られただけなんです！ 何も怪しいことないです！ たまたま迷ってこのへんウロチョロしただけでえ！」

だが、降り立った場所に待っていたのは、何だかよく分からない女性だった。

降下先の近縁にパルスタワーがあるため、少しだけ距離を取った結果、荒野のど真ん中にたった一人うろついていた現地住民らしき人物の目の前に着陸してしまったのだ。

逃げようとするのを艦の代表たる私、そして一見して武装していないリーシュが降りて止めようとするが、逃げられないと勝手に判断したのか突然土下座を始めて泣きだしてしまっただけだから困ったものだ。

「サボってっつたんとちゃうんですー！ ただほんまに道に迷っただけでえええ！」

「あ、あの、少し落ち着いてもらえますか？ 我々はあなたに危害を加えるつもりは……」

「ひええええええ！？ 不気味な青いタヌキダルマのユウレイが口きいとるううう！」

「だ、誰が不気味な青いタヌキダルマですかああ！」

女性が悲しい表現をしたのは、私の襟デバイスからホログラフとして投影されたコロの映像である。

ベーベンからヴィレに来るまでにいつの間にかデバイスが改造されて、コロが音声だけでなく映像として出現するようになってしまったのだ。

もの凄く余計なのだが、コロ曰く、乗員のメンタルケアに役立つ僕の可愛らしいボディの映像は絶対に役に立つはずですよ！ ということらしい。

今のところ、現地住民の第一印象は不気味な青いタヌキダルマのようだが。

「ちよつとコロ、消えて。ねえちよつと落ち着いて。今、よそから連れて来られたって言うてたけど、あなた、この星の人じゃないの？」

「消えてってリーシュさんヒドイ！ あ、か、艦長何をっ！！」

私はリーシュに従い、デバイスを操作してコロの投影を消去させた。

「う、ウチはランビュランスの宇宙基地の一般庶民ですうう！ って、え？ あれ？ あんた達、ランビュランスの警備兵とちゃうん？」

パルスタワーのごとく地面を掘削しかねないほどの土下座を敢行していた女性がばつと顔を上げてきよとんとした顔でこちらを見た。

「違うわ。ランビュランスとは無関係の星から来たの。ねえ、もし良かったら知ってることを詳しく聞かせてもらえないかしら」

「知ってることゆーても、あんた達、本当に警備兵じゃないん？ 洗いざらい吐かした後には用済みじゃー言うて凍結させたりするんちゃうの？」

「凍結！？ やっぱり凍結って本当のことなの？ って言うか、人も凍結させられるの！？」
「そらランビュランス本星はもう80年も前に住民ごとかつちんこつちんになつとるもん」
「80年前！？」

これは流石に驚いた。

人間ごと、しかも80年も前にランビュランス本星は既に凍結させられていたというのか。
「そんなことが、許されるの？」

「許すも許さんもないよ。事情が事情やし、それに今は独裁者エルドラムにはだーれも勝たれへんもん。言うこと聞いとらんと即カチコチではいおしまいやもん」

「……エルドラム？」

新しい名が出てきた。

独裁者、という響き。この女性が洩らした『よそからムリヤリ連れて来られた』という発言。そして住民ごと凍結した星。

ランビュランス本星に渦巻く闇は、思いのほか深刻なようだ。

「あんた達、本当に、本つつつ当おおおおに、ランビュランスとは関わり無いんやね？」

「誓って無いわ。あたしたちはランビュランスの横暴を止めに来たの、お願い。知つてること、他に何でもいい。聞かせてもらえないかしら」

「うーん……」

女性はまだ迷っているようだったが、そのとき唐突に、別の声がかげられた。

「トオルー？ 何してるのー？ その人達だーれー？」

間延びした、少年の声だった。

見ると、一体いつの間そこにいたのか、私の背丈の半分くらいの少年が、眠そうな目でこちらを見ているのだ。

「クルト！ 近づいたらあかんよ！ はよ逃げ！」

「えー？ なんでー？」

クルト、と呼ばれた少年は、トオルという名らしい女性の警告を無視して近づいてくる。

「この人達別に危ない感じしないよー？」

「怪しいモンこそ怪しく見えないのが世の常ちゅーもんや！」

「だとしてもさー、トオル一人だましてもー、こんなに大きな艦持つてる人にはあんまり意味ないんじゃないかなー」

「何か仰天するような陰謀に巻き込まうとしとるかもしれんやろーが！！」

もう無茶苦茶である。

「ごめんねー。トオルってば心配性でー」

「心配性にもなるわ！ こんな辺鄙な星で家族ともよう連絡も取られんのに来る日も来る日も穴掘り穴掘り！ パルスタワーは穴掘る機械じゃなかったんかったの！ 何でウチらが人

力で穴掘らなならん！」

「そういう星だから仕方ないじゃんー」

トオルと違って逆に異様に落ち着き払っているのは不思議だが、このクルトという少年の方がまだ話がしやすそうだと踏んだ私は、彼にランビュランスやパルスタワー、エルドラムという独裁者について知っていることを教えてほしいと頼んだ。

するとクルトは少しだけ考えるような仕草をしてから、その実どこまで考えているのか分からない口調で言った。

「いいよー。でもここだとトオルの言うように警備兵に見つかっちゃうかもしれないから、少しだけ歩いてもらっていい？ 僕らの『隠れ家』に案内するからー」

「隠れ家？ ここから近いの？」

「うーん、それは教えられないんだよなー」

「教えられないとはどういうことですか？」

「わっ？ 何これー」

そのとき艦内からどんな操作をしたものか、私の操作に反逆して、コロのホログラムが投影されている。

クルトはコロの姿を興味深そうにまじまじと眺めるが、コロは少し陰しい表情を作ってクルトを見上げていた。

「かわいいー」

「ええ？ どこがや。こんな不気味なタヌキが可愛いとか、ほんまクルトは変わつとるなー」

トオルは呆れ顔だが、クルトは本気でコロに興味を抱いたようだ。

「か、かわいいなんて、そんな、そんな、そんな言葉に惑わされませんよ！」

「思い切り動揺してるじゃない」

リーシュの突っ込みは無視して、コロは続ける。

「クルトさん。僕はこちらのクルーの安全を守る使命を帯びたAIです。隠れ家の場所を教えられないということは、誘拐の可能性を考えねばなりません。教えられないというのなら、艦長達があなた方に同行することはできません……」

「取引ってそーゆーものでしょー。君達がどういう経緯でこの星に来たかは知らないけどー。僕らは僕らで自分達の安全が第一なんだー。その安全を犯して君達を案内するならー、少しはこつちの言うことに従ってもらいたいって思うのはおかしいかなー？」

間延びはしている。

だが、言うことはコロよりも、トオルよりも、圧倒的に冷静で筋が通っている。

私は、もしかしたらこのクルトは少年ではないのでは、という疑問を抱いた。

よく見ると、トオルとクルトの外見は同種の人類ではなかった。

トオルは私やリーシュとほぼ変わらぬヒューマンタイプだが、クルトの耳介は魚類かそれ

に類する生き物を思わせる形状をしていた。

成人年齢に達してもヒューマンの半分ほどのサイズにしか成長しない人類も、宇宙には存在する。

トオルとクルトがエルドラムとやらに強制的にこの星に移住させられたのだとしたら、ランビュランスが管理する宙域はそれなりに多くの人類が住んでいるのかもしれない。

とにかく、クルト達に害意が認められない以上、こちらの求めに応じクルトが条件を出してくるのは自然なことだ。

「……分かりました」

コロはしぶしぶ引き下がる。

もちろん、こちらも単純にクルトの言うことを聞くのではなく、ついて行くメンバーを選びたいと言うと、

「それは別にいーよー」

クルトは了承してくれた。

私はいざというときのためにリーシュには艦に残ってもらい、一見して武装しているようには見えないレナとタイネーブに随伴してもらうことに決める。

「艦長、大丈夫なの？」

リーシュは心配そうにするが、仕方がない。

こちらの責任者たる私が行かないことにはクルトの信頼は得られないだろうし、ミュリアやフィデルには残ってもらわないと、いざというときに艦の安全を確保できない。

艦との通信はコロがいるので問題は無いはずだ。

「……分かった。でも、気を付けてね」

リーシュが納得したのを見て、クルトが宣言する。

「話はまとまったー？ それじゃあ、トオルも立ってー。みんなでヴァルのところにいこー」

※

「俺達は……俺達はなんつってっつっていう罪深いことをしてしまったんだああああああ！」

一言で言って、暑苦しい男だった。

「この俺一人の命で償えるとは思えないが、止めるな、俺はここで腹を切る！ お前達頼む！俺の首を持ってお前達が旅してきた星の人々に詫びを……！」

「わああああー！ ヴアルすつつぷすつつぷー！」

「あんたが腹切ったって誰もなんも喜ばんわアホなこと言うなやドアホ！」

「止めるな！ 止めないでくれ！ 俺は、俺は！ 行ってええええええ！ ムリだあああ！」

「……………何なんです？ この人達」

タイネーブの冷たい一言が、そのまま私の感想の全てだった。

「いてえええええ！ 腹から血があああ！」

「……駄目ですよ。刃物で遊んじゃ」

たしなめるようなレナの声は優しくだったが、顔はあまり笑っていなかった。

クルトとトオルにヴァルと呼ばれた大柄な男は、ペーパーナイフのような短い刃物を腹に突き立てようとして、先端を皮膚に触れさせた角度が悪かったのか、少し皮が剥けて血が出てしまい、涙目になってじたばたと暴れまわっていた。

流石のレナも、このテンションに対して治癒紋章術を使う気にはなれないらしい。

「と、ところで宇宙から来た心の友よ」

「誰が心の友ですか誰が」

まさかコロがツツコミ役に回る日が来ようとは思ひもしなかった。

「お前ら、独裁者エルドラムについて知りてえということだったが……すまん！ 俺達は大した情報は持ってない！！」

「ええ！？ 何ですかそれは！ こんな思わせぶりなところに連れて来ておいて！」

タイネーブが怒りだしたのを見て、ヴァルは慌てて首を横に振る。

「待て待て待て！ 俺達がお前らに話せるのは、俺達にとっては普通の事だって話だ。お前達がどう取るかはまた別だ！ ただ……お前達が旅してきたパルスタワーが建設された星のことを思うと、お前達にとつては愉快な情報はあまりない！」

このヴァルという男は、性格は極めて面倒だが、どうやら悪い人間ではないらしい。

そしてやはりヴァルは、クルトともトオルとも違う人種であるらしかった。

尖った耳介と刺青のような全身の模様、赤い瞳が特徴的だった。

ひたすら回りくどく暑苦しいヴァルが語り、それだけでは訳が分からなかったのでトオルとクルトが注釈してくれたランビュランスの歴史は、我々にとつて衝撃的なものであった。

その病の名を『灼死病』と言った。

ランビュランス本星に突如として蔓延したその病は、人類の存続を危ぶませるほどの猛威を振るう。

故郷に存命しているというトオルの祖母の両親、トオルにとつては曾祖父母の代に最も猛威を振るい、一度罹れば助かる術はなく、罹患者の死亡率は100パーセント。ものの20年で惑星の総人口が半減したというから、如何に恐ろしい病か分かるうというものである。

「人口の、半分が……」

レナが呻く。

そんなことが起これば、もはや国家が存続できないレベルである。

灼死病が一切手の打ちようのない病であると気付いた80年前のランビュランス惑星政府は、現代のCS計画の基礎となったランビュランス本星の凍結計画を進行させる。

その目的は極低温下における灼死病ウイルスと罹患者の不活性化であった。

だが、星を凍結させてなお、灼死病の完全封印には至らず、未だ治療の糸口すら見つかっていない状況であった。

だが十数年前から、本星を脱出した人々の疎開先である新惑星や宇宙基地で、長い時間をかけて、潜伏していた病が再び流行を引き起こしたのである。

ランビュランス政府は新たな凍結計画を実行する必要に迫られたが、本星が凍結しているため、これからのコールドスリープ事業に必要なレアメタル採取を他の惑星で行う必要が生じ、その準備として到達可能宙域に惑星にパルスタワー建設を進めてきた。

そして件の独裁者エルドラムは、ほんの数年前に新たなコールドスリープ事業である『CS計画』を引上げ、突如として台頭し権力を握ったらしい。

時を同じくして、ランビュランス人の避難先となる宇宙基地や惑星に、相次いで光る杭が撃ちこまれた危険な生物、バーベッドが出現し、大きな被害を出すに至る。

エルドラムは軍を掌握してバーベッドに対処することで、支持を盤石なものにしていった。エルドラムの台頭以後、灼死病を封じる名目で多くの宇宙基地がCS計画の対象になり、疎開先の行政機関や宇宙基地も、相次いでエルドラムに恭順を誓うようになった。

そうでなければ、いつ言いがかりをつけられてコールドスリープさせられてしまうかわからないし、いざバーベッドが現れたときに守ってもらえなくなるかもしれないからだ。

「ウチらみたいな宇宙時代しか知らん若い世代は、エルドラムにとっては貴重な労働力なんや。せやからランビュランスに所属する人間はみんな、一定年齢に達すると強制的にCS計画に従事させられるんよ」

「それが嫌だーって抵抗する勢力も無いではないんだけどねー。やっぱエルドラムの組織力の方が上でさー。バーベッドも怖いしねー」

「俺達ヴィレの労働者の中にもそういう組織があるって噂なんだ！ だから俺は、こうしてひっそり隠れ家を作って誘いが来るのを待ってるんだが……！ やはり噂は噂なのか！ 一向にお声はかからねえんだ！」

独裁体制に対抗する組織であれば、それなりの隠密性や組織力が求められるだろう。だが、ヴァルはどう考えてもそういう組織に属せる性格ではない。

「ということ、まさかこの隠れ家って……」

「……そーゆーことやね。子供の秘密基地と一緒に。ほとんどウチらの休憩所なんよ」

タイネーブの呆れた声に、トオルもまた呆れたように肩を竦める。

「それで、結局あんた達はこのこと聞いてどうしたいん？ 何も知らんとヴィレに来たっちゆーのは仕方ないにしても、ことはエルドラムを倒せばええっちゆー話でもないんよ」

それは分かる。

トオル達一般庶民の生活が幸せに満ちているかどうかはともかく、ランビュランスの情勢はエルドラムを頂点とした独裁体制が有効に機能し、安定している。

我々としては、CS計画に伴うパルスタワー建設の被害を減らしたい一心でここまで来たが、実際にそのCS計画とパルスタワーがランビュランス人の生存に関わる戦略であったと判明した以上、悪の親玉を倒してそれで終わり、という単純な解決はもう望めない。

今単純にエルドラムとやらを排したところで、政変と政争が起こり益々ランビュランス人の環境が混乱するだけだ。

エルドラム体制が混乱すれば軍も混乱し、バーベットの被害も拡大してしまうだろう。

「でも、だからってパルスタワーの建設を認めるわけにも……」

ランビュランス人が種として安定的に存続しようとしたとき、どうしてもパルスタワーで奪わずにはいられなかった。

だが、中には奪われたことにすら気づけず、それによって惑星の正常な文明進化が阻害されてしまった星すらある。

それは、決して許されることではない。

「これは、この場では結論が出ない話じゃないかしら……」

レナの言うことに、同意するしかなかった。

未開惑星を無法に盗掘したことは、確かに悪だ。

だが、ならば我々に、病に侵されたランビュランス人に何もしいまま死ぬと命ずる権利はあるだろうか。

ループした私の思考を代弁するように、タイネーブが悔しげに言う。

「そのことと、エルドラムの独裁はまた別のこともかもしれません。でも、パルスタワーはエルドラムが台頭する以前から建てられ続けていた……そうすると、エルドラムだけを単純に責めることもできませんよね。艦長、一度戻って、リーシュさん達とも話し合いませんか。場合によっては……」

ここで、この宙域のトラブルから手を引く。

あまりにも尻切れトンボで、釈然としない幕切れにはなるだろう。

だがここは銀河連邦の法秩序の及ぶ宙域ではなく、我々にランビュランスを救う力はない。無力感に打ちひしがれながら、宙域を去るしかないのだろうか。

私達はヴァル達に丁重に礼を述べて、隠れ家を後にする。

艦に話を持ち帰り対応を検討するという実の無い状況に立ち至ったのが、情けなかった。持ち帰るとは言っても、リーシュ達もコロのデバイスを通してヴァル達の話を知っている。

きっと今は声をかけてこないだけで、艦内でも侃侃諤諤【かんかんがくがく】の状態になっているに違いない。

荒涼としたヴィレの大地をとぼとぼと歩く私達に、クルトが追いすがって来たのは、ヴァル達の隠れ家を出てから少し経った頃だった。

「ねーねー待って待ってー」

「クルトくん？」

レナが振り返って、クルトが来るのを待つ。

「ねーねー、さっきのかわいいAIの子、また出せる？」

「かわいいAI……？ コロのことでしょうか」

タイネーブが真剣に分らないという顔をするので私はおかしくなってしまうが、恐らくコロのことなので、私は素直にコロのホログラムを出現させる。

「わー！ やっぱりかわいいなあ！」

「んふふふ、クルトさんは分かっちゃいますねえ！」

「かわいいし、賢そうだし、きっとランビュランス製のAIには想像もできないような凄い機能があるんだろうなー」

「当然じゃないですかー！ 僕は連邦の最新鋭AIですよ！！」

「うん、だからねー、そんな賢くてかわいいコロくんがプレゼントがあるんだー」

「おや、なんでしょう？」

「うん。これ」

クルトはポケットからスカヤナーのような端末を取り出すと、ホログラムのコロの眼前にそれをかざす。

コロは少し首を傾げるような動作をしつつそれを見つめていたが、

「えっ……ええ？ えええええ？ こ、これは……！！」

突然、真剣な顔になってクルトと端末を何度も見比べる。

「く、クルトさん、あなた、一体……」

「これがねー、ランビュランス第二宇宙基地のアクセスコードだよ。エルドラムの目を盗んでCS計画に反旗を翻そうとしてる科学者チームの隠れ家の一つなんだー」

「……クルト君？」

「クルト君、まさか、君……」

「君達の動きはー、きつとこの星に降りた時点である程度エルドラムに察知されると思うんだよねー。でもこの航路でこの認証コードを使えばー、軍の検問くらいは楽にすり抜けられると思うよー。見たところ船、結構ロボロミみたいだしー、必要なら向こうに修理の依頼しとくからー。センサー類とシールド発生装置と外壁の換装かなー、必要なのはー」

クルトは端末をポケットにしまうと、相変わらず眠そうな顔のまま、ぺろりと舌を出した。

「ヴァルとトオルはねー、いい人達なんだー。ああいう人達は、平和になったときにこそ必要な人なんだよー。蛮勇を振るって政変に巻き込まれて死んでほしくないんだー」

私もコロも、タイネーブもレナも、眠そうな少年を驚愕のまなざしで見つめていた。クルトはそれ以上何も言わずに、

「それじゃ気を付けてねー。ばいばーい！」

と、子供のように手を振って、元来た道を駆け戻ってしまった。

ヴァルが言っていた、エルドラムに反旗を翻す組織。

クルトがその一員で、ヴァルとトオルが妙な真似をせずに安全に過ごせるよう見張っていた、とでもいうのだろうか。

「凄いです、艦長。この複雑な暗号パターン。準備されてる機器も最新のものです。クルトさん、僕のことを可愛いつて言うくらいハイセンスなだけじゃなく、もしかしてとんでもない技術者なんじゃ……」

コロも、余計なことを言いつつもただただ驚くしかないようだった。

艦に戻った我々は、最早迷うことはなかった。

クルトからもらったデータを元に次の目的地を選定する。

ランビュランス近傍、第二宇宙基地A区画。

奇しくもその宇宙基地こそが、コロが輸送船のデータから割り出した、『ランビュランス軍が敢えて回避している宇宙基地』だったのだ。

これが偶然の一致とは、とても思えなかった。

「運命を手繰り寄せるって、こういうことを言うんでしょうか、レナさん」

タイネーブが呆然と言うと、レナは首を横に振る。

「分かりません。でも……クルト君達と艦長達、手繰り寄せようとした人達が一つの所に集まったから、きっと何かが変わったんだと思います」

ならば、変わった何かを私達は逃してはならない。

ヴィレを後にした私達は、いよいよ、全ての核心へと迫ろうとしていた。

※

そこは、暗く、広大で、そしてうすら寒い場所だった。

「嫌な感じね。滅びゆく種族のいる所って、必ずこんな空気になるのかしら」

泰然としつつも、油断なく杖を構えるミュリアは周囲を見回してそう吐き捨てた。

「滅びるかどうかはまだ決まっていませんよ、ミュリアさん」

レナが嗜めるように言うが、ミュリアは言葉を翻さない。

「どうかしらね。頼ってはいけない力に頼った挙句、破滅を迎えた種族を一つ知ってるの。」

「そこも、最後にはこんな空気だったわ」

仲間のブレーキを自認するミュリアの言葉は手厳しい。

頼ってはいけない力。確かにパルスタワーの力は頼ってはいけない力だろう。

パーチェで手に入れたランビュランス人のものと思しき音声データにすら、悪魔の力、と評されているくらいだ。

『皆さん、気を付けてください。宇宙基地内に、バーベッドと思しき反応が無数に見受けられます。遭遇した場合の戦闘行動は、なるべく控えぬにお願いします』

そこにウイニーからの通信が入り、ネルが小さく肩を竦める。

「……だそうだ。バーベッドは、果たしてどちらなんだろうね」

ランビュランスの力なのか、ランビュランスに敵対する力なのか。

「進めば分かるわ。行きましょう」

リーシュの合図で、私達は廃棄されたランビュランス第二宇宙基地の探索に出発する。

「しかし、宇宙基地とはいえ、ここは人工的に造られた場所なんだろう？ バーベッドは魔物や動物に光る杭が刺さっているものなのに、どうしてこんなところで発生するんだい？」

ネルの疑問はもつともだ。

ランビュランス第二宇宙基地は、番号が若いだけあって元はランビュランスにとって極めて重要な地位を占める基地だったと予測できる。

そういう基地には民間人が生活する居住区が設けられていることがあり、基地が放棄されるに当たり、例えば捨てられたペットなどが野生化し、それがバーベッドになってしまった、と考えることもできる。

「人が作った宇宙基地の中で動物が野生化って、そんなことがあり得るのかい？」

確かに言葉に直すと奇妙極まりないが、他に想定できることが無い。

「あまり、想像したくないですね。こんなところに取り残された動物がいたとしたら、どんな気持ちでいたんだろう……」

レナが沈痛な面持ちになる。

ヴァル達の灼死病の話を信じるなら防疫上の観点からペットの扱いは特に悲惨極まったものと推測できる。

他ならぬ私自身、故郷が連邦の宇宙基地だから、いざというときの動物の扱いは幼い頃から学校で散々周知されてきた。

だから、宇宙基地の中にバーベッドがいること自体は決して意外でもなんでもない。

『艦長！ バーベッドの反応が急接近してきます！ 接触します！ 皆さん戦闘用意を！』

だが、コロの警告が発されて全員が身構え、やがて目の前に現れた事態だけは、流石に想像できなかった。

『あれえ！？』

コロが頓狂な声を上げるのも無理はない。

それは、簡易AI制御の多脚戦車とでも呼ぶべき兵器であった。

どこからどう見ても有機的な要素は見当たらず、壊れかけの関節から飛び散る電撃や、脚部が床面を叩く金属的な音まで、議論の余地なく人工物だ。

だが、そんなロボット兵器に、光る杭が突き立っていた。

バーベッドだ。だが、生物ではない。

「な、なんなのこれは！」

「これは……どういふことかしらね」

「考えてるヒマはなさそうだ。来るよ！！」

まるで生物であるかのように、巨大な多脚戦車が鳴動とともに突撃してくる。

「全く！ 冗談じゃないわ！ こんなのに手加減しなきゃいけないなんてっ！」

ミュリアが戦車の足元に氷の檻を出現させ動きを止めるが、背部のポッドから古めかしいタイプの追尾ミサイルが発射される。

「相手は手加減する気はなさそうだけどね！」

その全てをネルがダガーの投擲で撃墜し、

「レイツッ！！」

動けなくなったところに、レナが光の雨の紋章術を叩きこむ。

体が凍りついた地面に叩きつけられてなおもがこうとする戦車に、

「そのままへばりついてっ！！」

リーシュのシャイニーランサーが突き立ち、体を地面に縫い留めた。

動けなくなったところに私が接近し、動力中枢と思しき場所を威力を絞ったフェイズガンで撃ち抜いて、ようやく多脚戦車は動きを止めた。

初めて遭遇する意外過ぎる敵に対して見事にコンビネーションを決めることができたが、それはそれとして、無機物バーベッドの出現に、私達の動揺は収まらなかった。

「これで、倒したことになるのかしら」

「どうかしらね。動かなくなったみたいだけど、杭は光ったままだし」

「やりにくいことこの上ないね」

それぞれに、氷の檻の上で煙を上げて動かなくなったバーベッドを見下ろし、顔を顰める。

「艦長、これ、ウィニーとコロにすぐに分析してもらった方がいいと思うわ」

『既に取りかかっていますリーシュさん。でもこれ、遺伝情報とかあるんでしょうか……』

「分からないけど……」

これまでのバーベッドの分析では、外見や生物相如何に関わらず同一の遺伝因子を持っていることが確認されている。

だが、流石に無機物バーベッドが現れることは予想できなかったため、果たしてウィニー

の専門分野に収まるのかどうか。

一気に深まったバーベッドの謎に、ミュリア達と同じく思案を巡らせていたそのとき、
「動くな」

唐突に、私は背中に何かを突き付けられ、凝固してしまった。

リーシュ達も、突然降って沸いた何者かの声に思わず私の方を見て身構える。

「ランビュランスの宇宙基地に潜入するコソドロめ。一体何が目的じゃ」

「コロ！ 何してたの！ 艦長が！」

『あわわわわ！ か、艦長が人質に！ 僕のセンサーには何も映ってなかったのにいいい！』

「ふっふっふ、ランビュランスに仇為すものはみな宇宙の藻屑と変えてくれよう……」

私は、正直どう反応してよいものやら判断がつかかねていた。

慌てるコロとリーシュ達を見ながら、一体この場をどう収めるべきか、真剣に悩んでいた。

悩んだ末に、とりあえず振り向くことにする。

『艦長！ 危ないですよ！！』

「艦長！！」

「はにゃっ!?!」

悲鳴は、私の腰の高さくらいから上がった。

コロとリーシュの必死さに比べ、あまりに気の抜けた悲鳴であった。

「……にゃ、にゃはは、バレてしまうたか」

それは、ちっちゃな博士だった。いや、ちっちゃな博士の姿をした、子供だった。

「こ、子供……?!」

「どういふことだい……こんな所に子供が？」

多脚戦車バーベッドが燻る傍らに、その少女は突如として現れた。

着ているというより着られているという方が相応しい白衣に、擦り切れたスニーカー。

私の腰に突きつけられていたらしい銃のようなものは、ショッキングピンクの外装の、一

見してそうと分かるオモチャの銃。

ピンクの髪の毛がライムグリーン色であり、バーニイのような、妙に弾けた雰囲気を感じさせる子供だった。

私がすぐに後ろを振り向けたのは、少し下を向いたら視界の端にそれらがちらちら映り込んでいたからだ。

「子供子供と失礼な。 齢13にして灼死病研究の第一人者、ベルダ・クレーマン。その道ではちよつとした有名人じゃぞ。お前さん達、物を知らんな」

「灼死病の、研究者？」

「こんな子供が……?!」

「だから子供子供としつこいと言うに!!!」

『13歳で惑星を蝕む死病の専門家とは……かのレオン博士を彷彿とさせますね……』

「お前さん達、ヴィレの連中が知らせてきた異星の連中じゃな？ わしがこの第二宇宙基地A区画医療研究所の責任者じゃ。お前さん達の艦に、今整備ロボットを向かわせた。壊さんでやってくれよ？」

随分と手回しが早いが、他に研究員はいないのだろうか。

「おらん。ここはこしばらくわし一人じゃ。最近までエルドラムにも放置されておったのだが、研究員の中に灼死病を患った者が出てな。彼らは本星で凍結処理され、遠からずこの基地全体がCS計画の対象となるじゃろう」

バーベッドがうろつくこんな広大な宇宙基地に、こんな子供がたった一人とは。

今日まで、よく無事だったものだ。

「わしにはちよつとした裏技があるぞ」

私の疑問に、ベルダと名乗った少女はオモチャのフェイズガンの銃口を吹く真似をする。

「もちろんわし一人残っていたのには理由がある。お前さん達、ヴィレの連中の信用も得たようじゃが、どうじゃ」

年齢に似合わぬ話し方をする少女は、危なっかしい手つきでフェイズガンのオモチャを指先でくるくると回すと、格好良く白衣のポケットにねじ込もうとして、

「あっ」

当然のように失敗して、足元に落としてしまった。

軽い音を立てたショッキングピンクの銃に全員の視線が注目し、しばし気まずい沈黙が流れる。

だがベルダはすぐに何事もなかったかのように銃を拾い上げてポケットにしまい直し、私を見上げて不敵に笑ったのだった。

「お前さん達、パルスタワーの建設を止めたいんじゃろ？ わしと、手を組まんか？」

※

「ほほお！ これがお前さん達の艦か！ ギンガレンポウとやらは随分と高度な技術を持つておるんじやお！ あれがこうで、これがこうで、おつ、これはなんじゃこれはなんじゃ！」

「ああんっ！ そこはっ！ 艦長おおお！ ベルダさんを止めて下さいいい！！」

「何を言うか良いではないか良いではないか！」

「駄目です僕は機密の塊なんです連邦軍人でない者を艦橋に入れた挙句にあちこちいじりまわさせるなんて艦長これ軍法会議ものであああああああああんんっ！」

「艦長、私初めて、コロを気持ち悪いって思っちゃいました」

「レナさあああああん！？ 何てこと言うんですかああああああんっ！」

「ほほう！ここをいじるとこうなるわけじゃな！？ どれ、もつといい声をあげてみい！」
「いいいいいやあああああああああ！！ ううっ！ はああああん！！」

「ミュリアさん、そろそろ止めた方が……」

「はあ……」

タイネーブがおずおずと言い、何で私が、という顔をしながらもミュリアは二本立てた指から二筋の雷撃を飛ばし、

「あわわわわわっ！」

「はにやっ!？」

コロには直撃させ、ベルダには足元に落として動きを止める。

「……にやっはっはっは！ すまんすまん！ 新しい機械や技術を見るとついいじり倒したくなってしまうのが科学者のサガでの！」

「はあっ……はあっ……こんな滅茶苦茶にされて……僕もうおヨメに行けないっ!!」

何なんだこれは。

「ふむ、お前さん達がどういう経緯で第二宇宙基地にたどり着いたのか大体分かったぞ！」

「嘘でしょ？」

「嘘ではないぞ」

「嘘だと言ってくださいいいいい！ そうでないと機密を守るAIとしての沽券がああ！」
「メーア、エスペランス、ファブリーク、パーチェ、ベーベン、ヴィレのプルスタワーを見てきたようじゃな。メーアとエスペランスはお前さん達の命名かの。ベーベン近くのアステロイド帯では随分と苦労したようじゃな」

「いやああああ！？ 頭の中覗かれてるううう!？」

ベルダの手には、いつの間にかやたらファンシーなデザインのタブレット式端末があり、どうやらそれがコロを通して艦のデータバンクにアクセスしているらしい。

コロがメーアからこつこつと溜めてきたファイルの解析をつい最近ようやく終えたことを考えると、言語形態が根本から違うファイルデータをこの僅か数分の間に完全に把握するベルダとファンシー端末の能力は、恐るべきものだ。

「どうやらお前さん達、大体のことを理解しておるようじゃの。話が早くて助かる」

「そっちは助かってても、こっちは困る。僕らはこれ以上プルスタワーを建てさせないためにここに来たんだ。ランビュランスの窮状は理解できるけど、だからといって暴挙を見過ぎすわけにはいかない」

フィデルの低い声のおかげか、テンションが高かったベルダは少し落ち着いた様子で、大きく一度息を吐いた。

「……それに関しては、わしもランビュランス人の一人として、詫びのしようもない。悪いことだとは、誰もが分かっておった。じゃが、他に方策が無かったのじゃ」

「……」

「わしの話聞いてくれるか？ これ以上パルスタワーを建てさせないため、ランビュランズ人が命惜しさに犯してしまった罪を雪ぐため、二度とあの悪魔の装置を使うことのないように、わしにはお前さん達の力が必要なんじゃない」

「悪魔の装置……？」

聞き覚えのある言い方にフィデルが首を傾げるが、ベルダは構わず続ける。

「わしは、この第二宇宙基地A区画でずっと、灼死病の研究を続けておった。目的は一つ。治療方法の確立じゃ」

「そんなことが可能なんですか？ ヴイレの人達の話じゃ、80年前から星を凍らせる以外の対策が全く打っていないって感じてましたけど」

「タイネーブの問いに、ベルダは苦い表情で頷いた。

「その通りじゃ。灼死病はウイルス性の病じゃ。基本的に、血清治療以外の活路は見出せん。じゃが知っての通り、灼死病は致死率100パーセントの恐るべき病。血清培養の実験は、どれも失敗に終わった」

「動物実験でも駄目だったの？」

「奇妙なことじゃが、灼死病ウイルスは人類にしか影響を及ぼさんのじゃ。ランビュランス施政下には様々な種族がおるが、例外なく人類のみ発症する。類人猿のような、遺伝的に人類の近傍にある動物種も発症せん。血清を作るなら何が何でも人間からでなければだめなんじゃ」

「まさか、私達に人体実験の材料になれって言うんじゃないわよね」

「そんなことは言わん。じゃが、先程も言った通り、罹患者が出たことで第二宇宙基地はCS計画の対象となってしまう。これ以上この場所で研究を続ける時間が無いのじゃ。80年もの科学者達の抵抗の証を、凍り付かせるわけにはいかんのじゃ。ランビュランス人の積み上げた研究を、この艦に持ち込ませてはくれんどうか」

それは問題ないが、肝心のデータはベルダの持っている端末にあるのだろうか。

「いいや、わしの手によらぬ過去の研究データは、基地内に封印されたままなんじゃ。その中には、パルスタワーに関する研究も多く含まれておる」

「パルスタワーの研究！？」

「そうじゃ。ウイルスの症状を治療できないのであれば封印を、ということでも生み出されたのがパルスタワーじゃ。そしてそのパルスタワー研究の第一人者として本星の全球凍結事業を行う第一次建設計画に携わったのが」

「コロにいたずらをしかけて喜んでいた少女の声が、恐ろしく年輪を重ねたかのような、低い響きで発せられた。」

「わしの祖父殿。ブラン・クレーマン博士じゃ」

※

薄暗く、人が出入りしなくなって久しい宇宙基地を、私達は全員で小さなベルダの後に続いて歩く。

研究が専門のウイニーも、無機物バーベッドのデータを直接採取するために同行している。警備システムはコロ管理下のオートで。ベルダの整備ロボットに艦の整備を任せ、全員がベルダの後に続き、この宙域を侵すランビュランスのパルスタワーの真実に近づこうとしていた。

「ランビュランス人の総人口が半減したのは、最初に灼死病が確認されて、20年が経ったころじゃった」

道々、ベルダは語る。

「我が祖父殿、ブラン・クレーマンは政府チームに入ったばかりの気鋭の研究者じゃった。多角的な対策を模索していた政府は、病原の封じ込めに成果を上げた祖父殿の技術成果を採用した。病理的な解決が全く望めない状況だったのも、それに拍車をかけたのじゃろう。祖父殿主導で、パルスタワーの第一次建設計画がスタートし、ランビュランス本星が掘削されたレアメタルをエネルギー源として、最初に凍結処理が施された」

母なる星を、凍結封印する。

その計画に携わらなければならぬ者の気持ちは、とても推しはかることはできない。

「じゃが、パルスタワー建設計画を進めるうちに、開発当初は想定しなかった事態が次々と起きた。超磁界の発生による精密機器の破損。惑星の中核部への影響。タワー周辺の遺伝異常。バーベッドの出現などがそれじゃ。じゃが、灼死病とその罹患者の封じ込めが最優先だったランビュランスと祖父殿……クレーマン博士は、そのことに気が付くのが遅れた。いや、或いは、気が付いていても、どうにもできなかったのかもしれない」

ベルダは淡々と語るが、時折どうしようもない悔悟か、懺悔のような感情が籠るのが、やりきれない。

13歳の少女が、まるで生まれた星の全ての業を背負っているかのごとく、異星からやってきた私達にランビュランスの罪の告白をしているのだ。

「概ね政府の想定していたCS計画が折り返し地点に来たとき、じいちゃまは研究施設として使っていた無人惑星から密かに脱出し、わしの元に戻ってきた。そして、CS計画を押し進めつつ今後のランビュランスの未来を示そうとする政府首脳部にパルスタワーの増設計画廃案を直訴するべく再び旅立ち……二度と帰ってこなかった。ここじゃ」

ベルダは、ある区画で立ち止まると、入り口の指紋認証と虹彩認証をパスし、扉を開ける。

そこは、研究室と呼ぶにはあまりに寂しすぎる場所だった。

物が無いのではない。

残された実験装置や、コンピューター類、デスクや椅子などの調度に、この研究室で研究していた人物の個性がそのまま宿り、それが時の流れの中で色褪せようとしていたのだ。

主な研究用コンソールは二卓。いずれも大人用のものだが、その中間地点に、きつと両者を繋ぐトラムのように何度も研究室の中を往復していたであろう、小さな子供用のキヤスタ―椅子が埃を被っていた。

デスクの上には、花柄の防塵クロス。チェアのヘッドレストには作り手の未熟さを感じさせる手作りのヘッドレストカバー。

いつからそこにかけているのかも分からない白衣のポケットには、穴でも開いてしまったのか、これまた不器用なバーニイのアップリケ。

この研究室の『主』はピンクと、花と、バーニイが大好きな少女だったのだ。

今、私達に背を向け、手元のバーニイ型タブレットと研究室のコンピューターを同期させたベルダの背を見ながら、やがて再生される映像に見入る。

それは、どこかの宇宙基地での、国家の実力者による演説のようだった。

演説は、CS計画が順調であること、ランビュランスの未来が明るいこと、その未来はパルスタワーによってもたらされていることを長々と語っていた。

やがて、演説の場に一人の老人が乱入する。

最初に演説していた男は、その人物がパルスタワー建設の功労者であることを聴衆に紹介しようとするが、老人は取りあわない。

最初に演説していた男からマイクを奪おうとして、SPらしき者達に取り押さえられようとしていた。

そのとき、聴衆の間から悲鳴が起こった。

唐突に沸き起こったパニックの中から私達が聞き取れたのは、

「灼死病の感染者がいる！」

という数多の悲鳴だった。

そこから先は、目を覆いたくなるような惨状だった。

我先にと逃げ出そうとする聴衆と、状況を映しきれないカメラ。そして、一瞬の後。

「っ……」

ベルダが、画面から目を背ける。

映っていたのは、血まみれで倒れる老人の姿だった。

混乱の中、聴衆に落ち着くよう警告する最初の男と、灼死病ウイルスを現場にバラまいたのが、今倒れている老人であると喧伝する声を、マイクが拾っていた。

「そんな……そんなことって……」

リーシュが両手で口を押さえ、レナとウィニーも見ていられずに顔を背ける。

フィデルとミュリア、ネルとタイネーブは厳しい顔つきのまま、画面を睨み据え、私も怒りに我が身が震えるのを止められなかった。

為政者達は、今更パルスタワーを止められなかった。

止めれば、CS計画を推し進める自分達の支持基盤が揺らぐからだ。支持が揺らげば、治安が乱れ、ランビュランス本星の回復は彼方に遠ざかる。それは分かる。だが、それでも。だからといって、こんなことが許されるのか。

こんな、あまりに単純で、バカバカしい茶番が通ると彼らは考えたのか。

しばらくは混乱が続いていたが、やがて事態が大きく変わる。

聞くものを不快にさせる慟哭の如き大音響をカメラが拾っていた。数分続いたその音が止んだと同時に突然、現場に多くの人間が乱入し、治安維持行動に出たのだ。

「うっ……」

「こ、これは……」

ミュリアとタイネーブが、遂に顔を背けてしまった。

それは、一方的な虐殺だった。

老人を殺した最初の権力者すらフェイズガンで撃ち殺し、パニックに陥る聴衆すらも無差別に銃撃し、やがてほとんど動く者がいなくなった演説の場で、現れた男は唐突に、政権奪取を宣言する。

『我が名はエルドラム。今日このときよりランビュランス惑星政府と軍は、私が掌握した』
そして、倒れたカメラが唐突に持ち上げられ、宣言をした男の顔を映し出す。

それを見て、私とリーシュ、フィデルとネルが同時にあつと叫んだ。

その顔に、見覚えがあったからだ。

「ベルダ。あれが……あの男が、エルドラムなのかい？」

ネルの問いに、ベルダは振り返らずに頷く。

驚くのも無理はない。男の姿を最も間近に見たのは、ネルだ。

間違いない。エルドラムは、ファブリークで我々の目の前から転送で逃亡した、あの白髪眼帯の男だ。

「最初に殺された老人が、わしのじいちやま、ブラン……ブラン・クレーマン博士じゃ」

ベルダの喉が一瞬ひっかかる。

今殺されたのが祖父などと平然と言える13歳がいるはずがない、いてはいけない。

「そして、最後に民衆を虐殺し、独裁宣言をしたのがエルドラムじゃ」

独裁者の名にたがわぬ残酷な政権の篡奪に震えそうになる怒りを、次の一言が打ち鎮めた。
「じいちやまはこっちの机。エルドラムはそっちの机。二人とも、いつもこの研究室でわしの下らない遊びにつきあってくれた。優しい、大切な家族じゃった」

映像の中にいる残酷無比なスタートを切った独裁者と、ベルダが告げるエルドラム像。

まるで結びつかない『エルドラム』に、私達はただただ混乱を深くした。そこに、コロから緊急警報が入る。

『み、皆さん！ 大変です！ 今皆さんがいる場所に、バーベッドが集結しつつあります！』

「こんな時にやってくるなんて」

「運が悪い連中だね」

ミュリアとネルが、それぞれに武器を構え、小さく息を吐く。

研究室の隔壁は完全防音のはずだが、それでも伝わるバーベッド達の気配のようなものを、私達全員が感じていた。

「ウイニーさんとベルダちゃんは、私が守ります。でも余裕そうなら、私も殴りに行きます！」

タイネーブが両の拳を打ち鳴らし、

「久しぶりに、先進惑星兵器が相手か。たまには、思い切り暴れるのもいいかもな」

「そうですね。私も久しぶりから、腕がなまってないか心配」

フィデルが剣を鞘から払い、レナもらしくなく好戦的なことを言い出す。

「艦長」

傍らのリーシュの声に、私も頷きフェイズガンの安全ロックを外した。

当初の予定通り、宇宙基地の損害に配慮しつつ、バーベッドを排除する。

そして、ベルダとブラン・クレーマン博士の研究データを全て持ち出し、ランビュランス本星に向かい、真実を明らかにする。

私は当初からの我々の方針を、もう一度確認した。

「……了解！」

リーシュの復唱とともに、私達は研究室から飛び出す。

そこには無機物、有機物問わず、まるで我々に打ち倒されるためにやってきたかのようなバーベッドの山が待ち構えていた。

私のフェイズガンの号砲とともに、宇宙の旅を共にした戦士達が一斉に襲いかかる。

フィデルの剣が薙ぎ払い、ミュリアの雷が打ち貫く。

ネルの刃が切り裂き、レナの拳が打ち砕く。

リーシュの放つ光の弾丸が爆砕し、一体、また一体とバーベッドが倒れて行く。

「じいちゃまはいつも言っておた……じいちゃまはいつも言っておたのじゃ。わしの研究でこの宇宙に流れる涙が1m1でも減ったら幸せじゃって。こんな病と暴政に怯える世界を、知らぬ間に蝕まれる星々をじいちゃまが望むはずがない」

研究室外の通路の戦闘状況が混雑しているため、ベルダとウイニーの護衛に専念することに決めたタイネーブの耳に、小さな科学者の呟きが届く。

「じいちゃまが死に、同じ痛みを抱える者として、わたしにはエルドラムを止める義務があるんじゃ……だからお願いじゃ、わたしに協力してほしい」

「大丈夫だよ」

ベルダの頭を、ウイニーが撫でる。

「艦長は……あの人は、そういうの、ほっとけない人達だから」

「そうです。結構勢いで突っ走りますけど、不思議となんとかしてきちゃった人達ですからこれからも、きつとなんとかしちやいます。だから」

「ウイニーとウイニーは、ベルダを抱きしめた。」

「もうちよつとだけ、頑張りましょう。ここからは、私達が一緒です！」

きつとコロがいれば、そういうことは責任者たる私が言うべきだ、と茶々を入れてきたことだろうが、これでいい。

私がこれまでの旅で、彼女達の信頼を勝ち得ていたからこそ、ベルダも彼女達の言葉にならずいてくれたのだ。

バーベッドを片付け終わっても、我々に休息は与えられない。

ランビュランスのCS計画実働部隊の接近を、コロが感知したのだ。

あらかたデータを回収し終えて艦に戻った私達を出迎えたのは、まるで新品同様に外装が換装された、GFS S・3214Fだった。

「もう凄いです！ 外装も、センサーも、シールド発生装置もなにかもぜーんぶびっぴかびかに生まれ変わっちゃいました！ 見てくださいよこの僕の勇姿を！」

コロ自身は何も変わっていないように見えるが、本人がそう言うのならそうなのだろう。

私は接近するCS計画実行部隊を回避しつつ、ランビュランス本星への進路を取れるかとコロに問う。

「ふっふっふ、僕を誰だと思ってるんですか。行ってみせましょうランビュランス本星！ 降りてみせましょう安全な場所！ クルトさんのデータとベルダさんの修理によって、この宙域にもはや僕の敵は存在しません！ 行きますよ！ 皆さんハーネスは着けましたか？ 右手にはヴィレ、左手にはランビュランス、これより左へ曲がります！ それでは出発しますよっ！ 行っきましょうおおう！」

コロの号令とともに、遠慮なくバーニアをふかして私達はランビュランス第二宇宙基地を後にする。

スクリーンから遠ざかる宇宙基地の映像を、ベルダは少しだけ切なげな眼で追っていたが、すぐに眦を手で拭って気持ちを切り替えた。

その瞳は、使命に燃えた一人の戦士の瞳だった。

私は、そんな彼女の使命に寄り添おうと心に誓ったのに。

わずか数時間後に、それができなくなろうとは思いませんでした。